

都道府県・指定都市番号	3	都道府県・指定都市名	岩手県	研究課題番号・校種名	1 幼稚園
研究課題	幼稚園教育要領の趣旨等の実現に向けた評価方法の工夫、及び評価に基づいた指導内容や指導方法の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 幼稚園（園児数）	はなまきしりつはなまきようちえん 花巻市立花巻幼稚園（73 人）				
所在地(電話番号)	〒025-0076 岩手県花巻市城内 10 番 5 号（電話・FAX 0198-23-5301）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.city.hanamaki.iwate.jp/shimin/142/145/p002289.html				
研究のキーワード	評価項目・評価指標の改善 育ちと学びの捉え・つながり 見通しをもった指導の改善 チームでの評価 組織力向上				
研究結果のポイント	<p>○評価項目・評価指標を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照らし合わせながら作成し直したことで、全職員の共通認識が図られ、日々の保育の振り返りの中で幼児一人一人の姿から育ちと学びをより多面的に捉えることができ、指導の工夫改善につながった。これを基に改善した評価項目を教育課程に反映させ、幼児の実態を踏まえつつ、育ちと学びの見通しをもった指導につなげた。</p> <p>○指導に生かす評価をチームで検証する過程において、教育課程の評価を組織的に行うことの必要性を再確認した。教育課程の編成と同時に園運営についての見直しを行い、一層、教育目標の具現化が図られた。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

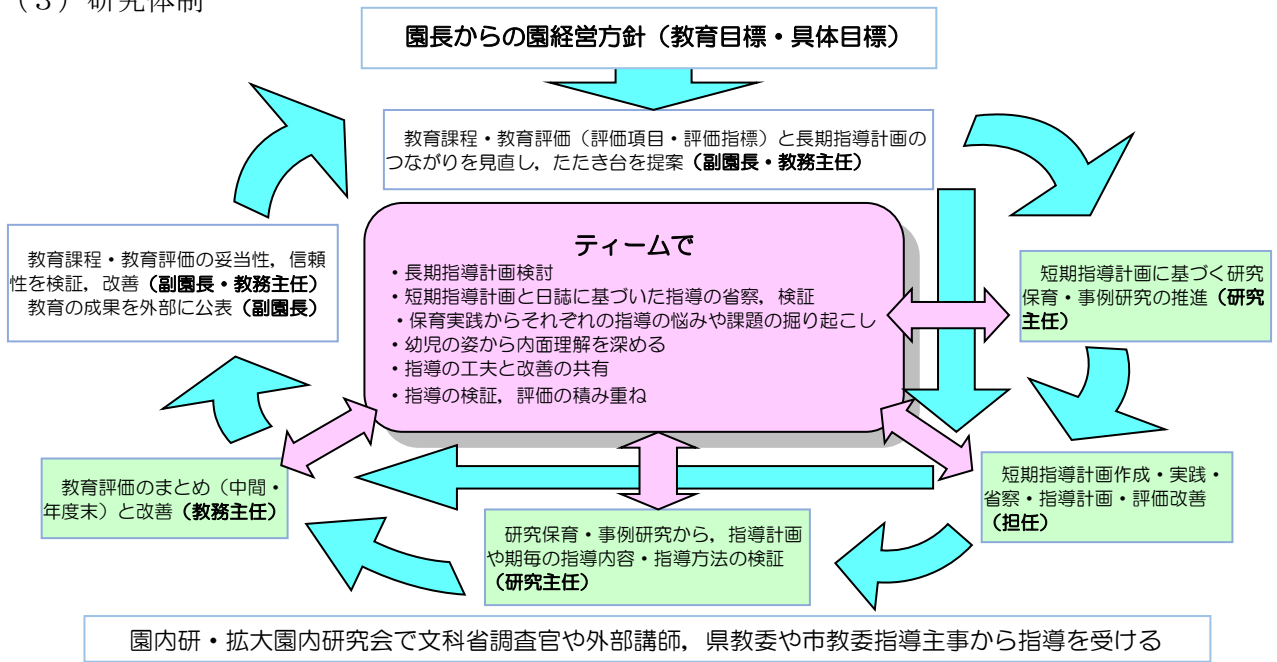
育ちと学びをつなぐ保育を目指して
～チームでの評価を生かした教育課程の編成～

(2) 研究主題設定の理由

本園は「げんきな子」「やさしい子」「かんがえる子」を教育目標として掲げ、その子らしい育ちと学びを支えることを大切に、保育を展開している。幼児一人一人が主体的に遊び、生活する姿から育ちと学びを捉え、具体的な指導の省察を積み重ねている。指導の検証・評価をそれぞれの取組に適したまとも（各学年や全担任、全職員…以下「チーム」とする）で行うことは教育の質の向上につながると考える。

新幼稚園教育要領に示された『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』との関連を考慮しながら、それぞれの期の評価項目・評価指標の妥当性や信頼性を高めていくことは、教育課程の改善につながることと考える。幼稚園における『主体的・対話的で深い学び』の実現とともに小学校への学びの接続のために、教育課程、それに基づいた指導計画、評価項目・評価指標の見直しを図り、指導を改善していくことが、幼児一人一人の育ちや学びをつなぐ教育の質の向上になると考えた。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成29年度	<ul style="list-style-type: none"> ○教育課程及び指導計画と評価項目を見直し、たたき台作成 ○実践事例の集積と分析・考察 (指導内容や指導方法の検証) ○期毎の評価指標、評価表の改善をし、指導計画の指導の内容に反映させる ○教育課程及び指導計画と評価項目の改善 ○外部講師を招いての園内研究会の実施 ○拡大園内研究会において、調査官に指導を受け、研究成果の検証
--------	---

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ① 発達の過程とそのときの学びや、学年間、小学校との学びのつながりを見直し、教育課程と教育評価 (評価項目・評価指標)、指導計画を改善する。
- ② 教育課程の編成や園運営について全職員が参画意識を持ち、チームで実践していくための組織運営の見直しを図る。

(2) 具体的な研究活動

今年度、人事異動により3分の1の職員が新しく配属となる。そのうち4人は初任であることから、以下の点を工夫改善した。

<研究内容① 教育評価を生かした教育課程の改善>

本園の教育課程は、『4歳児を一期から四期、5歳児を五期から八期』として編成している。全職員での教育評価は、年二回 (中間：7月末・期末：12月末) 実施。教育評価の評価項目は、教育目標の今年度の重点目標に添って期毎に設定しており、長期指導計画の指導内容と直結している。

4月：○昨年度の一期から八期までの評価項目を一覧にし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照らし合わせながらつながりを検討する

○指導計画と評価項目とのつながりを吟味し、見直し部分を朱書きにして提案する

4月～7月：○学年ミーティングや園内研究において、幼児の具体的な姿から日々の保育を検証し、その時期の評価項目を見直す (事例2)

7月末：○以下の3点について共通理解を図り，中間教育評価表により評価を行った

- ・評価の目的
- ・評価指標の捉え
- ・評価を生かした指導計画の改善

8月中旬：○中間教育評価をまとめ，共有する→教育課程に反映させる（事例1）

事例1 中間教育評価のまとめから次期の指導につなげるチーム会議設定の工夫

教育目標『やさしい子』の具体目標「自立心をもって生活する子」の評価項目の一例（5歳児六期抜粋）

評価項目	『自分達で生活の場を整え，見通しをもって行動しようとする』	
評価指標	評価	幼児の姿から自分の指導を振り返り記述（抜粋）
自分たちで進んで生活の場を整え， 見通しをもって 行動しようとする		・楽しかった遊びの共有が，自分たちの遊びの場を丁寧に掃除し片づけることや，遊びの場づくり等，遊びを自分たちで進める姿につながった。※1
自分たちで生活の場を整え， 見通しをもって 行動しようとする		・自ら気づき，進んで行動できるような環境の構成を見直し，見守ることを大事にすれば，もっと自ら進んで行動しようとする姿を引き出せたのではないかな。
友達の動きや教師の援助で気づき，自分で生活の場を整えて行動しようとする		・「自ら進んで」の姿がなかなか表れなかったのは，教師の援助が多すぎたためではないかな。※2

見直し部分は太字

学級の幼児の姿から指標にそってそれぞれが判断し○をつける

【この評価項目のまとめの過程での気づき…抜粋】

- ・評価から見た成果を共有する必要性（※1）
- ・評価項目や評価指標の捉えを共通理解する必要性（※2）

【改善】中間教育評価のまとめの過程で評価項目や評価指標の捉えにバラつきやズレがある項目が見られた。そこで全職員で共有する前に，各学年での「中間教育評価チーム会議」を実施する必要があることが浮き彫りになり，設定する。

【各学年での「中間教育評価チーム会議」実施の成果】

- ・各学年で評価することで，幼児一人一人の姿を多面的に捉えることが可能となり，妥当性のある評価ができた。更にこの評価を生かし，幼児のよさや可能性を伸ばすための具体的な指導について検討することができた。
- ・「どのような育ちや学びの積み重ねが今のこの姿に結び付いているのか」「その時期の有効な指導は何か」等，指導計画と照らし合わせながらチームで評価したことにより，発達の過程の共通理解が図られ，教育課程の改善に反映することができた。
- ・チームで幼児の変容の姿や成長を確かめ合い，互いの指導を認め合う機会となった。幼児の育ちと学びのために支え合って指導していくという教職員同士のつながりを再認識した。

【チーム会議後に日常の活動の中で確認された幼児の姿】 （5歳児七期 12月長期指導計画抜粋）

指導の工夫 ・発表会に向けて学級で舞台練習の順番決めを相談し，翌日の見通しをもてるような掲示の工夫をする。	幼児の姿 ・舞台を使える時間に気づき，劇の仲間同士で声を掛け合う。保育室から劇の大道具や小道具を舞台に運び，準備をし始める幼児もいる。自分たちで劇練習の始まりの合図をする。
---	--

【成果】

- ・チームで指導の方向性を確かめ合い，支え合いながら保育を展開しているという安心感と信頼感から，担任が安定し自信を持って保育を展開することができた。そのことは，幼児一人一人の自己発揮と友達と共感し合い，互いを認め合って生活を進めようとする姿（『教育課程五歳児七期の発達の過程の姿』）として表れている。

事例2 指導の検証方法の工夫

指導計画検討や学年ミーティング，研究保育や事例研究等での検証方法を工夫する。

- 会議資料事前配布。それぞれが付箋に意見を記入し，ワークショップ形式で協議を行う。
- 担任が付箋を類型化し，まとめ毎にキーワードとなるタイトルを付け協議の柱を打ち出す。

- 会議のファシリテーターや記録は、担当が交代で行う。

【成果】

- ・回を重ねる毎にどの職員も付箋記入枚数が増加した。年齢や経験年数等を問わず自分の考えや気づき、悩みや疑問等を出し合い、協議が深まった。様々な見方や考え方に触れ、より幼児の内面理解を深め、指導を検証する重要な情報となり、日常の保育実践につながった。
- ・検証方法の工夫により、職員一人一人が自らの指導を客観的に振り返る意識を高め、限られた時間の中でも協議の焦点化が図られ、有効な指導の検証の積み重ねができた。

<研究内容② 教育目標の具現化のための園運営の見直し>

事例3 園務分掌評価における園運営への参画意識を高める工夫

【目的】 園務分掌の評価（中間・年度末）を行うことにより、園としての組織的・継続的な改善を図り、教育の質の向上を図る。
(教務主任・園務分掌評価中間まとめ抜粋)

<評価項目> ・視点	29年度の方向性	指標	基準	中間評価 (○成果・●課題)
<教育課程編成> ・教育評価の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・新幼稚園教育要領を念頭においた評価項目と指標の提案。 ・チームでの評価を積み重ね、指導の改善と教育課程への反映 	チームでの評価が教育課程に位置付き、指導に生かされ、幼児の育ちと学びにつながった	(省略)	<ul style="list-style-type: none"> ○チームでの評価を教育課程に反映させるために新たにチーム会議を設けた。そのことによりチームでの指導の改善に生かすことができた。 ●短期（日々の保育の振り返りやミーティング、研究保育等）の評価をもとに中間・年度末評価を行っていく。

【成果】

- ・職員一人一人が園を運営している組織の一員としての自覚を持ち自分の役割を認識し、自ら設定した評価項目に取り組み、主体的に成果と課題を把握できるようになった。

3 研究の成果と課題 (○成果●課題)

- 今期の教育評価（評価項目・評価指標）の改善が次期の指導計画・指導内容の改善となり、次年度の教育課程の改善に直結する等、教育課程改善のサイクルが明確となった。そのことにより、幼児の実態を踏まえつつ、育ちと学びのつながりの見通しを持った指導の手立てを見出すという評価の見直しが図られた。
- 教育課程の評価を組織的に行い、「全職員が教育課程の編成に携わっている」という意識を持つことができた。教育課程の編成と同時に園運営の見直しを図り、教育評価（評価項目・評価指標）の妥当性を高める取組を通して、幼児の姿を多面的に捉えることで幼児理解が深まり、指導の改善がなされた。組織的な評価の取組により、職員の資質向上と、環境の中で伸び伸びと主体的に活動する幼児の姿に反映され、教育目標の具現化に着実に結び付いていることが確認できた。
- どのような体験の積み重ねが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の土台となっているか、幼児一人一人の育ちと学びをよりの確に捉え、更に妥当性や信頼性の高い評価ができるよう記録と評価方法の工夫をしていく。

4 今後の取組

新幼稚園教育要領を踏まえた教育課程と教育評価（評価項目・評価指標）の改善を積み重ね、幼稚園教育における妥当性や信頼性の高い評価の在り方を追究する。幼児一人一人の具体的な姿から指導を検証していく過程において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連をより明確にした評価を工夫し、幼稚園教育で育まれた幼児の学びの連続性を保証するために、小学校教員等と共有しながら研究を推進していく。